僕の昭和史 II

安岡章太郎

Peace
cigarettes

僕の昭和史Ⅱ
安岡章太郎
Peace
cigarettes

僕の昭和史Ⅱ
安岡章太郎
Peace
cigarettes

講談社

僕の昭和史②
定価——一三〇〇円
昭和五九年九月二〇日第一刷発行　昭和五九年一〇月二二日第三刷発行
著者——安岡章太郎
© Shotaro Yasuoka 1984 Printed in Japan
発行者——加藤勝久
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二　郵便番号一二二　電話〇三—九四五—一二一一　振替東京八—五九三〇
印刷所——㈱精興社　製本所——㈱藤沢製本
ISBN 4-06-201202-2 (0)
落丁本乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。(学—1)

僕の昭和史②

「ピース」は昭和二十一年、戦後はじめて「コロナ」とともに発売された。定価七円。すでにインフレであったが、かなり高価なタバコであった。昭和二十七年、おりしも講和条約発効の頃、R・ローウイの斬新なデザインによって、いちやく「光」にかわる人気タバコとなった。

装幀＝田村義也

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

昭和二十年八月十五日、午後一時になると、すでに新宿の街では〝戦後〟がはじまっていた。

僕は、食糧品のギッシリ詰まった重いリュックを担いだまま、まず新宿駅へ行った。どうせ切符は買えないにきまっている。しかし、これは食糧品を身延にいる叔父の家族たちに届けることを請負った手前、一応はやっておかなければならないことであった。新宿の駅舎も焼けており、近くのビルの何階かに旅行者査察官の事務所が移転していて、そこで旅行目的を申請した上、それが通れば切符を売って貰えるというわけだが、僕はその赤茶けたビルを外側から見ただけで、なかに入るのは止めてしまった。旅行目的の申請といったって、実際にその資格があるのは軍公用の旅行者だけで、それ以外の者が申し出たって受けつけられるはずがないからだ。しかし仮に、万に一つ、その可能性があったにしたところで、僕はそれに賭けようとは思わなかった。端

的にいえば僕は、このまま東京を離れる気にはなれなかったのだ。なぜだろう？　東京にいても、もう空襲にあう危険はないからだろうか。それもある。しかしそれよりも僕は、もう叔父の命令に従ってその通り行動することが何としてもイヤだった。

駅の構内は人の波で埋まっており、たまに空間があると、そこには便所から溢れ出した大小便の汚物が溜っていた。焼け野原となった都会の住民は、すでに羞恥心を失っており、不潔なものにも麻痺していたが、毀れた敷石の上を大量の汚物がだぶだぶと押し流れてくるのを見ると、精も根も尽き果てて床石にベタリと腰を下ろしていた人たちも、飛び上るようにしてその場を逃げ出した。

駅前の表通りには、いつもなら尾津組の露店が並んで、針だの、櫛だの、安全カミソリだのを売っていたのに、この日は正午の玉音放送で早仕舞いしたのか、店は一軒も出ていなかった。裏通りにまわったが、ここもガランとして人影がなかった。外壁だけが焼け残った武蔵野館の角までくると、四つ辻の電信柱のかげに薄汚れた手拭を頭に巻いた男が立っていた。小柄な老人が、すうっと男の傍に近づいて金を渡すと、小さな紙包みを受けとって、そのまま足早に去った。

僕のポケットには、財布とは別に、けさ叔父から手渡された十円紙幣が二枚入っていた。身延までの旅費にしろというのである。普通の切符代の三倍に当る金額であった。「キップが買えなかったら、キセルで行け。もし車掌か駅員に不正乗車を見つけられたら、この金を渡せばいい」

と、叔父はいった。しかし僕は、そんなことまでして身延に行きたくはないし、汽車に乗りたくもない。だから、叔父に貰った金をいつまでもポケットに入れているのは何となくイヤだった。僕は、男の傍へよるとポケットの金をそのままつかんで渡した。男は一瞬、僕をけわしい眼で見詰めたが、金を受けとるが早いか、正面を向いたまま、手で覆った品物を僕の手に移し、頤を振って「早く行け」というシグサをした。

僕は、急ぎ脚にガード下の曲り角まできて、手の中の品物をあらためて見た。タバコだった。ひかりが十本入っている。僕は、こおどりしたい心持だった。これで二十円とは儲けものだ。タバコは一週間で一と箱とかの配給があるはずだが、僕はそれさえ受けとっていない。こころみに一本、火を点けてみると、まちがいなく辛味の強い「ひかり」の味がする。——専売局のちゃんとしたタバコを、真っ昼間、公道の上で売っているのは、やっぱり戦争がおわった証拠だな、僕はそんなことを思いながら、出来たらもう十本も買い足しておこうかと、線路沿いの裏通りからまた武蔵野館の前に出た。しかし、そこにはもう先刻の男は見当らなかった。わずか五分ぐらいの間に商品（おそらくは盗品）を売り尽してしまったのか、彼の姿は消え失せていた。

その晩、僕は世田谷のSの家に泊めて貰った。Sは僕よりも六、七歳も年下だったから、そんなに親しい間柄ではなかったが、兵隊に行っていない友人といえばSぐらいしか思い当る者はな

かった。ところが訪ねてみると、そのSは海軍の甲種予科練に応募して飛行下士官になり、前線に出動中であるという。僕は二重の意味で驚いた。Sというのは、大学生の僕が少々持てあますぐらいの不良少年で、まだ中学生のくせにタバコも吸うし、女も知っていた。そのうえジャズ・シンガー志望で、灰田勝彦の一番弟子とかのそのまた弟子になっていたこともある。

「ことしの五月に、どうやら特攻隊に入ったようで、いまごろは何処かで戦死していることと存じます」

と、Sの母親の言うのをきいて、僕は返辞のしようもなく、簡単にお悔みを述べると、早々に退散しようとした。しかし、Sの母は僕を熱心に引きとめ、上ってあの子のアルバムでも見て行ってやってほしい、という。そう言われると、僕は振り切って帰るわけにも行かなくなった。手土産の代りに、リュックサックの氷砂糖の袋を取り出して、障子のかげから顔を覗かせたSの妹に差し出した。彼女は一瞬おびえた眼つきになった。

「まあ、こんな貴重なものを」と、Sの母も言った。「せっかくだから、Rちゃん、一つだけいただきなさい」

「いいんですよ、袋ごと、どうぞ」

僕はおうようだった。どっち途、これは叔父のイントク物資だ。一人の息子を、一人の兄を、お国に捧げた母と子に、これを贈って悪いという道理はない。僕は氷砂糖のほかに、リュックサ

ックの中から、かりん糖だのコンペイ糖だのを、手当り次第に取り出して並べた。Sの妹は、はしゃいだ声を上げた。母親は、いったんは不興げな声になってこれをたしなめたが、僕が、

「いや、これはS君に渡すつもりで持ってきたのですから、代りにどうぞ召し上ってください」

と、その場の想いつきで出まかせにいうと、機嫌を直してこんどは素直によろこんでくれた。そして、こんなにいろいろの物を貰っても、お返しにするものがないので、ぜひ夕食を食べていってくれと言った。僕は内心、うしろめたさを覚えないではなかったが、いったん畳の上に腰を落ちつけると、重いリュックを背負って、まだ日盛りの町に出て行く気には、どうしてもなれなかった。

夕方になった。僕は、井戸端で顔や手足を洗わせてもらい、さっぱりとした気分で夕食の膳についた。食卓には野菜のイタメものと卵の料理が並んでおり、新鮮なトマトのサラダがあった。僕は、またしても叔父に託されたリュックから牛カンを取り出そうとしたが、Sの母親はほとんど懇願するように、それをとめた。

「いけませんわ、それは。今夜はこれで我慢なさってください。本当に何もありませんけれども、これでも結構おいしく頂けるはずですよ、……」

そう言いかけて、彼女は口ごもって黙った。たぶん（戦地の兵隊さんのことを想えば）というつもりであったのかもわからない。そうだとすれば、僕だって兵隊に行っていました、といいたいと

ころだが、それは言わなかった。どうせ戦争はもう終ったのだ。するとSの妹が言った。
「お母さま、電灯の暗幕、はずしましょうよ。きょう学校で、皆が言ってたわ、これからはどんなに明るく電気をつけたってかまわないんだって」
女学校一年生の彼女は、マセた口調でいった。母親は躊躇したが、僕がそれに賛成したので、電灯の傘をすっぽり覆っていた黒い防空暗幕は取り除かれることになった。
「せいせいするわね。何年振りかしら、こんなに明るい灯りの下でお食事するのは……」
まっ先にそんな声を上げたのは母親自身であった。実際それは何年振りのことだろう。シナ事変の頃には、まだ空襲をうける心配はなかったはずだが、灯火管制はもう何十年も前から続いておこなわれていたような気がしたものだ。食卓の明るさもさることながら、雨戸を開け放った縁先の庭に、アジサイの葉が灯火を受けて緑のいろを浮かび上らせているのが、僕には何か物珍しく懐しいものに思われた。
Sの妹は、海軍機が徹底抗戦のビラをまいてとおったという噂を学校できいてきたと言った。
「もしかしたら、その飛行機にお兄さんが乗ってるんじゃないかと思って……」
「馬鹿なことをおっしゃい。秀夫はとっくに死んでいます」
と、母親は即座に打ち消した。僕は、他に慰めようもなく、
「しかし、戦死の公報は入っていないんでしょう。それなら、まだわかりませんよ」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

と、見え透いたようなことを言った。母親は黙って僕にアルバムを差し出した。予科練入隊前後の頃からのものがいろいろ貼ってあるなかに、休暇で帰ってきたときのものとおぼしいSの写真があって、僕は心をうごかされた。真新しい白のワイシャツを着て、うれしそうに頬笑んでいる。衿の先が細長く尖ったそのワイシャツは、おしゃれなSが知り合いのシャツ職人に三拝九拝してあつらえたものに違いなかった。彼は、それを着てウクレレを抱え、鼻の穴をふくらませながら甘い裏声でハワイアン・ソングを歌える日がくるのを夢見ていたはずだ。

（ああ、Sのやつは、もう帰ってこないんだな――）

僕は、あらためて心の中でそうつぶやいた。

それにしても、その晩、僕はSの家で夕食を御馳走になっただけでなく、泊めて貰うことになったのだから、好い気なものであった。

「明日はどうなさるおつもり？」

夕食のあと、Sの母親に訊かれて、僕はなぜか咄嗟に嘘を吐いた。

「ひるすぎ新宿発の汽車で身延へ立ちます、切符はもう買ってあるのです」

すると、Sの母親は言った。

「そう。じゃ、こん晩はうちでお泊まりになるといいわ。ただ、蚊帳が一つしか出してないの

で、私たちと一緒に休んでいただかなくてはいけないんですけれども、それでよろしければ……」

常識としては、こんなふうに言われたら、これ以上迷惑をかけないように、引き下るべきところかもしれない。しかし僕には、常識を働かせる余裕はなかった。

「いや、すみません、それは有り難い。僕は蚊帳なんかいりません。どうせ今夜は、そのへんの防空壕にでも入って寝るつもりだったんです」

実際、僕はそのつもりだった。〝浮浪者〟という言葉はすでにあったとしても、当時は使われていなかったと思う。なぜなら、あの時期からしばらくの間、一般人と浮浪者を識別する方法がなかったからだ。罹災者、復員兵、そして大陸や殖民地からの引揚者、こういった人たちは、とくに都会地では厖大な数に上ったから、一時的に寝泊まりする場所にアブレることは珍しくはなかった。そして駅の待合室や地下道や、ちょっと休めそうな場所にゴロリと横になって夜を明かすぐらいのことは、大抵の人にとって別段、異常なことではなかったのだ……。だから、よその家で初めて泊めて貰うのに、そこの家族と同じ蚊帳の中で寝るぐらいは、何でもないといえば何でもない。

しかし正直のことを言えば、僕はその夜、何とも寝苦しい一夜を送ることになった。やはり雑念を生じて、しばしば輾転反側せざるを得なかった。言い遅れたが、Sの父親は民政官として南方に勤務しており、この人も生死不明の状態であった。八畳吊りの蚊帳は、大人が三人寝るのに

充分の大きでがあったが、夜中に眼を覚ますと、女学校一年生のSの妹の手や脚が、僕の胸の上に乗っていたり、腹を蹴とばしたりしていた。そして、そんなとき僕は、内務班で自分の小銃が銃架から外れて重おもしい音を立てながら寝床の上に倒れ落ちてくるような夢に悩まされているのであった。

「貴様、何をしている。銃は、かしこくも、(気ヲ付ケ!)天皇陛下からの預かりものであるぞ……。銃に一箇所痕をつければ貴様の指を一本、二箇所痕つければ貴様の指を二本、切り落す」

班付き下士官に詰め寄られながら、僕は必死で自分の人さし指を片方の手で握りしめている。と、ふと気がつくと、僕の鼻先に汗ばんだSの妹の髪の毛がかかっており、僕は自分の手が何をしていたのかと怖ろしくなって、あわてて両手を体側につけると、寝たまま直立不動の姿勢にもどって暗闇の天井を、しばらく絶望的な心持で見詰めていた……。

あくる日も、朝から晴天だった。僕はSの家を出ると、悔恨ともつかぬ奇妙な恐怖心に責め立てられながら、炎天の新宿の街をアテもなしに歩いた。睡眠不足の眼に、焼けただれた街は白っぽくうつり、こなごなになったガラスが突き刺さってくるようだった。リュックサックの重量は両肩に食いこみ、汗が眼蓋の内側に流れこみそうになる。

駅の雑踏ぶりは、昨日よりも一層ひどかった。人垣を掻き分けながら構内に入ると、白衣の病

兵が二人、時刻表を見上げていた。二人とも、痩せこけた肩に軍毛布の巻いたのを斜めに掛け、手に古びた飯盒をぶら下げている。病衣はネズミ色に汚れており、ツンツルテンの裾から細っこいシャモみたいな脚を覗かせて、それが大きな不細工な革の営内靴をつっかけている。おそらく二人とも、終戦命令が出ると早速、着のみ着のまま病院を追い出されてきたに違いない。

——ああ、おれもこの間までは、あんな恰好をさせられていたわけか。僕は、かすかな同情と優越感とをおぼえながら、同時に彼等が手にしている復員証明書にだけは、羨望の念を禁じ得なかった。とにかく、その紙がありさえすれば、いま汽車の切符が買えることはたしかだからだ。

僕には、もはや昨日市川の叔父の家を出てきたときのように、一人で東京じゅうをさ迷いながらリュックの中身の食糧を食いつくすまで好き勝手に暮らしてやろう、などという勇気は失われていた。もし、その勇気があれば昨日の晩、Sの家に泊めて貰ったりするわけがなかった。実際おれは、ゆうべ寝ながら何をしたのだろう——？　それを想うと僕は、記憶がほとんどないだけに自分自身が怖ろしかった。また、それ以上に僕は自分の存在が不安になった。いったいおれは、何をしたくて生きてるんだろう。焼けビルの外壁に、

詔勅必謹、一億総懺悔

と、はやくもそんなガリ版刷りのビラが貼ってあり、僕はそのビラから眼を外向けながら、腹立たしさと自己嫌悪とが一時にわいてくるのを感じた。——何だって、何のためにザンゲしなけ

りゃいけないんだ？　しかし、そうつぶやきながら、僕の内心にはたしかに〝懺悔〟に似たものがこみ上げていた。

きのうは自粛していた尾津組の露店が、きょうは表の電車通りに沿って立ち並び、そのまわりに盛り場の活気めいたものが、何とはなしに漂っていた。僕は、立ちん坊でタバコを売っていた男が何処かにいはしまいかと、きのうとおった裏通りの道を歩いてみたが、やはり見当らなかった。

もう一度、表通りにもどって、焼ける前のおもかげの残っていそうな店を探しながら歩いていると、伊勢丹が店をあけているのが眼についた。べつに買い物をする気はなかったが、通りを横切ってなかに入った。勿論、ロクな商品らしいものは何もなかった。昔、呉服ものや洋服生地が並べてあったショーウインドウには、水に濡れるとすぐ紙のように溶ける代用繊維の作業衣やカッポウ着が、陰気に所在なげにブラ下っているだけだった。それでも天井の高い建物は、外にいるよりは涼しく、埃っぽい風が吹きつけてこないだけでも、そのぶん居心地がよかった。

しかし僕は、いくらもいないうちに、からっぽのショー・ケースの向う側に、売り子の一人がぼんやりこちらを眺めているのと眼が合うと、たちまち或るおぞましさに襲われてデパートを出た。なぜだろう、その丸顔に口紅を塗った売り子の顔を見たとたんに、僕は寝苦しかったゆうべのことを憶い出し、じっとしていることが出来なくなった。

ふたたび駅の前へくると、僕は切符売場の窓口をさがした。切符は買えないにきまっている。しかし目的もなしに歩いていることには、もう耐えられなかった。それはムナしいというより、端的に苦痛だったのだ。切符売場は、「軍公用」と「一般」と二つ窓口が並んでおり、どちらも板切れで口をふさいであったが、「一般」用の売り口にだけは人垣が出来て、それが延々と建物の外につながり、さらに焼け跡の空地に何列にもなってつづいていた。僕はその列の最後尾についた。ふだんだと買物の行列につくのはイライラさせられるのだが、おかしなことにこの日は、そうやって皆と一緒に並んでいると、それで僕は何となく気分が落ち着いてきた。僕は背中のリュックを地べたに置いて、その上に腰を下ろした。行列の人たちも別段、切符が買えるものとは期待していないのであった。真夏の日に照りつけられて立ったり坐ったりしながら、何かをただ待つということのために待っている。誰かが、「きょうは二十枚ぐらいは売ってくれるかな？」というと、別の誰かが、「いや、そんなことはない、二百枚ぐらいは売るだろう」とこたえる。しかし、行列の人たちは、そんなヤリトリをまるで他人事のように聞き流しているようだった。僕の隣には、旧制T高校の制服をきた学生がしゃがんでいた。退屈して僕は、彼に話しかけた。

「君は、文科ですか、理科ですか。これから何をやるつもりなんです？」

僕は、大して意味もなしに、そんなことを訊いた。すると、その学生——彼は旧制高校生というよりは、まるで中学二、三年生のようにしか見えなかったが——は、驚いたように僕を見て訊

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook